

外国語学習に関する自己分析と動機の研究

— 学力別観点からの英米文学科新入生の実像 —

藤 澤 良 行
小 森 道 彦

1 はじめに：英米文学科生は英語ができる？

昨今の女子学生の女子大離れは激しく、関西地区だけをとっても新設学部はともかく、軒並み志願者が大幅に減少している。文学部さらに英米文学科というと、一部を除いて見る陰もないのが現状である。いくつかの高校の進路指導担当の教員に尋ねると、英語の成績のよい受験生の志向は国際関係関連学部、あるいは外国語学部へは向くが、従来の文学部については調べるまでもなく考慮の外に置かれるのが現実であるという。

また英語科や国際（教養）科を設置している高校は、すでに大学のいわゆる教養課程や英米文学科で行われている英語に関する授業の先取りに熱心に取り組んでおり、それなりの成果を上げつつある。時間数は少ないながら英語以外の第二外国語にも先進的に取り組んでいる高校も出現している。ということは、高校段階で身につけた英語力で、英語以外の新たな学問に進もうとする学生が増えてくることになる。このような高校生の現状を考えると、大学の英米文学科として、現在のままでは今後目指す方向が困難なものになることは避けられない。

高校生が大学教育に望むことは単に英語の習得だけではなく、それを生かしてさらに別の学問を身につけることではないだろうか。この現状をすくいとるべく大学 1、2 回生での一般英語の授業時間数の増加を含め、質的にも統一されたカリキュラム編成を築き上げつつある大学が増えており、またいわゆる副専攻制度を採り卒業単位に含まれる外国語の時間をかなり多く配当している大学もある。つまり、法学や経済学など専門的な知識を身につけながら、同時に英語の学力も保証するカリキュラム編成を採るところも出てきている。

では、このような世間の英米文学科離れをよそにあえて英米文学科を選ぶ学生は、どのような動機で、そしてどのような英語力を身につけて進学してくるのであろうか。当然英語を今まで以上に身につけたいというのが最大の動機であることは想像に難くないであろうが、詳しく見るとどうなのだろうか。そして学生の入学時の学力の現状はどうであろうか。また自分の英語力に対してどれほどの自信を持っているのだろうか。

一般に英米文学科に在籍しているということはすなわち英語ができる（「できる」ということにはいろいろな意味合いが含まれるが）と受け取られがちである。それが何より学生にとってプレッシャーになっていることは、英米文学科在籍生にインタビューしてみればすぐにわかる。実際にニュースや映画などで使われる英語を完全に理解することはかなり難しいが、それを「当然わかるはず」と周囲から思われてしまうために、逆に肩身の狭い思いにたえず付きまといられるこ

とになる。それを励みに英語力の向上に努める方向が出てくれば強い動機づけになるのだが、実際はそこまでの努力を惜しむ学生が多いのが現状である。

大学全入化（大学進学希望者と大学の入学定員が同数になり、やがて前者の数が小さくなる）が時間の問題となっている現状で、十分に英語力のある学生が英米文学科に進学することを当然視するのはもはや不可能である。大学（特に女子大学）で英米文学科が最近まで花形学科であったことを思うと隔世の感があるが、そのような思いはもはや英米文学科教員のセンチメンタルとの誹りを免れ得ないのかもしれない。

著名な大学の英米文学科学生はいざ知らず、中程度のレベル以下の学生を確保することが中心課題の大学や女子大の英米文学科では、カリキュラムの工夫が絶えず必要なのは当然であるし、英語力に関して損なわれがちな学生の自信をできるだけ確実なものに変えて卒業させることが至上命題になることは想像に難くない。そのためには、従来のカリキュラムに安住せず、新しい入学世代なりの英語力に応じたもので、かつ卒業までにいかに学生の英語力を引き上げるかに目標を置いた新しいカリキュラム編成が求められる。

そこでまず、英米文学科入学生の英語力に関する自己分析と学習動機を調べることから始める必要がある。出発点を押さえ、そこからどのように変化していくのかを具体的に捉えた研究が今後必要とされる。

2 学習動機の研究動向

言語学習における動機の研究は、カナダの Gardner and Lambert (1972) をもって嚆矢とする。主にフランス語を学習しているカナダ人英語話者を対象とする数々の研究で、学習者のもつ動機の特徴を「統合的動機づけ (integrative motivation)」と「道具的動機づけ (instrumental motivation)」の二元的な捉え方に分類した。

しかし、Gardner らの研究がそのまま日本の実状に当てはまるかということ必ずしもそうではない。日本での大学生を対象にした研究では、宮原他 (1997) がもっとも大規模でまとめたものといえる。この研究は中国、韓国、日本の3カ国にわたって計27の大学生と短期大学生を対象に、それぞれの学習実態と学習動機を調査してまとめたものである。ただこの調査は大学1、2年を中心として大学で教えるべき英語を解明しようとしている部分があり、大学入学時の学生の動機そのものは考察されていない。

その他、学習心理学の立場から、そして英語教育の立場から日本における英語学習者の動機研究は近年盛んになり、その研究結果が積み重ねられてきた。たとえば、中島・大里 (1999, 2000) は学習心理学からのアプローチであり、Yashima (1999) は英語教育の立場からのものである。この両者の共通点は、対象が大学生に限られているところであり、このことは先の宮原他 (1997) もそうであるが、日本での英語学習動機研究の多くに共通している。

高校生以下を対象にしている英語の学習動機の研究には堀野・市川 (1997) があり、従来の「内発的動機づけ」と「外発的動機づけ」の二元モデルに代わる「内容関与的動機」と「内容分

離的動機」の二元モデルを提案している¹。しかし高校生以下に対する英語の学習動機の最大の要因はテストであり入試であることは明白で、その部分を抑制した形の議論には疑問が残る。

つまり日本の英語学習動機の研究で被験者に大学生が使われるのは、入試という難関を越えてからの、これまでの英語学習を促していた最大の要因がなくなった段階での調査にならざるを得ないという日本における英語学習の特殊事情があるからだと推察される²。

3 本研究の目的

上で述べたように、英米文学科教員にとってこれまでいわば感覚的に捉えられていた入学生の英語学習観および学習動機を、統計による調査を行い客観的に把握することが主な目的である。具体的には、入学者が自分の英語力をどのように分析し、どのような学習動機を持つのかということを示し、さらにそれらが彼らの実際の英語力とどのような関連をもつのかを示すことにある。

4 調査方法

(1) 被験者

S女子大学英米文学科1回生105名(全員)を調査対象とした。調査用紙に関しては回収できたもの100枚を調査対象とした。

(2) 学力テスト

英語の学力を判断するのに入学式翌日(2000年4月3日)にG-TELP(国際英検、General Tests of English Language Proficiency)の3級レベルを使用した。結果は表1の通りで、これを母集団として総得点に従い上位群・中位群・下位群それぞれ約35名ずつ(同点者の存在による)の3群に分けて考察する。

表1 G-TELPの結果

	上位群	中位群	下位群	全体
平均	165.71	135.86	110.12	137.48
標準偏差	18.51	7.12	13.25	26.43
最大	225	148	125	225
最小	149	126	60	60
標本数	35	36	34	105

(3) 調査用紙

(2)の学力テスト直後に、個人情報収集の目的もあり、個人別学習履歴調査も含めた形でアンケートを実施した(Appendix参照)。これは母集団をG-TELPの成績別に3群に分けることを前提に記名式とした。具体的には、個人の学習履歴、現時点での英語力に対する自己分析や学習動機などで、自由記述部分と5~1の5点法による評定基準で回答する形式を併用した。調査項

目に関しては宮原他（1997）などを参考にしつつ独自の項目も加えた。

本調査が個人データの蓄積にもなり、学習動機の研究にも活用することを調査用紙冒頭に記し、調査時にも被験者に口頭で改めて説明した後で記入してもらった。本論文では、この調査項目の中の自己分析と動機の部分を使用している。

(4) 分析方法

数値の統計処理については、Excel 98 (Macintosh Edition) および SPSS for Windows (Version 10) を使用した³。

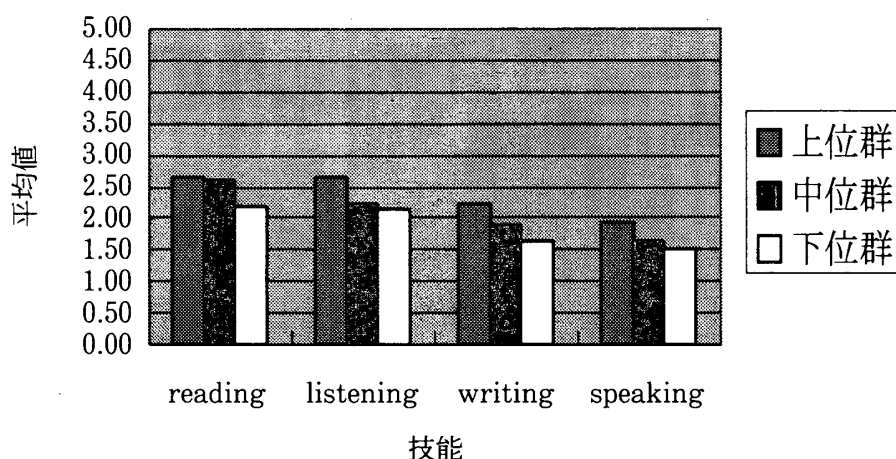
5 自己分析に関して

新入生が自分の英語力についてどのように分析しているかを把握することは、今後の英語学習のスタートとして非常に重要である。ここでは学生の英語力に関する自己分析と、前節で行った G-TELP による学力テストの結果の間の対応関係について考察する。

自己分析については、英語学力を reading, listening, writing, speaking の 4 技能の点から、それぞれの項目に関して学生自身に回答をしてもらった。各技能の調査項目は、宮原他（1997）を参考にして、5~1 で評定できるようにした (Appendix 「調査用紙」の項目 7~10 を参照)。

この調査結果を学力テストによって分けられた上位群・中位群・下位群別にグラフにしたのが図 1 である。ここで縦軸は各群の平均値を示している。

図 1 各群における自己分析の結果



この表からわかることは、まず①平均値がいずれの技能においても 5 点満点のうち 3 点を超えていないこと、②上位群・中位群・下位群の学力テストの成績 (表 1) と、この自己分析の平均値の間には明らかに対応関係があることである。つまり、学生は自分の英語力について、比較的客観的に自分なりの位置づけを行っているということである。

また、③受信能力である reading と listening に比べて、writing や speaking のような発信能力についての平均値が低い。(上位群の学生でさえ、writing と speaking の自己評価として 4

表2 各項目の回答平均値 (M) と標準偏差 (SD)

	全体 (N=100)		上位群 (N=35)		中位群 (N=35)		下位群 (N=30)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
27 本 (日本語も英語も可) を読むのが好きだった	2.68	1.05	2.74	1.07	2.71	1.05	2.50	1.04
28 英語が好きだった	3.54	0.88	4.00	0.80	3.46	0.89	3.10	0.71
29 外国語そのものに興味があった	3.69	0.92	3.94	0.84	3.51	0.98	3.57	0.90
30 将来日本で英語を使った仕事に就きたい	3.99	0.92	4.00	0.91	4.03	1.04	3.93	0.83
31 将来英語を使って海外で働きたい	2.96	1.25	3.06	1.35	2.88	1.30	2.87	1.07
32 中学高校の英語教員になりたい	2.18	1.12	2.34	1.16	2.06	1.11	2.07	1.08
33 子どもに英語を教えたい	2.81	1.05	2.91	1.04	2.57	1.12	2.93	0.98
34 外国人と交流したい	3.98	0.88	4.09	0.82	3.83	0.89	4.03	0.93
35 文化による違いを勉強したい	3.20	1.01	3.60	0.77	3.20	1.05	2.73	1.05
36 在学中に外国の大学に留学したい (1年以上)	2.87	1.16	3.29	1.30	2.53	1.05	2.80	1.03
37 在学中に短期語学留学をしたい (1ヶ月~3ヶ月)	3.69	1.19	3.67	1.22	3.60	1.17	3.77	1.22
38 英語の資格を取りたい	4.57	0.70	4.74	0.56	4.37	0.73	4.60	0.77
39 海外旅行をしたい	4.66	0.62	4.66	0.59	4.60	0.55	4.70	0.75
40 将来発展途上国で活躍したい	2.55	0.95	2.57	0.95	2.59	1.10	2.47	0.82
41 将来英語文化圏へ移住したい	2.84	1.19	2.94	1.26	2.74	1.27	2.80	1.06
42 海外からの英語の情報を理解したい	3.67	0.97	3.97	0.90	3.49	1.09	3.53	0.82
43 英語の聴解力を養成したい	4.64	0.66	4.83	0.45	4.51	0.82	4.60	0.56
44 自由英作文力を養成したい	4.20	0.82	4.43	0.81	4.17	0.79	3.97	0.81
45 英語の会話力を養成したい	4.73	0.51	4.83	0.38	4.57	0.65	4.80	0.41
46 英語の発音を改善したい	4.43	0.78	4.49	0.78	4.29	0.86	4.50	0.68
47 通訳技術を養成したい	4.02	0.92	4.23	0.81	3.80	1.02	4.03	0.89
48 翻訳技術を養成したい	3.66	1.02	3.63	0.97	3.69	1.08	3.63	1.03
49 英語の読解力を養成したい	4.30	0.71	4.43	0.74	4.11	0.72	4.37	0.67
50 英語の新聞・雑誌を読みたい	3.83	0.96	4.11	0.96	3.71	0.89	3.67	0.99
51 英語の文法力を養成したい	3.87	0.84	4.00	0.94	3.86	0.85	3.73	0.69
52 映画が字幕なしで見られるようになりたい	4.34	0.91	4.46	0.70	4.29	0.99	4.27	1.05
53 英語によるスピーチができるようになりたい	4.00	0.99	4.03	1.07	3.97	0.89	4.03	1.03
54 教養としての英語力の養成が必要である	4.21	0.86	4.34	0.87	4.03	0.79	4.20	0.92
55 文化・歴史理解に対して英語が必要である	3.29	0.85	3.49	0.78	3.23	0.97	3.10	0.76
56 日本を海外に紹介するのに英語が必要である	3.80	0.90	3.91	0.82	3.86	0.94	3.53	0.90
57 海外の文学や芸術の理解には英語が必要である	3.48	0.82	3.46	0.78	3.60	0.85	3.30	0.79
58 自国の文化・言語の理解には英語が必要である	3.27	0.96	3.20	0.93	3.34	0.91	3.27	1.08
59 異文化理解のためには英語が必要である	3.75	0.85	3.91	0.92	3.71	0.79	3.60	0.86
60 英米人の思想や宗教を理解するのに英語が必要である	3.51	0.93	3.69	0.90	3.60	1.01	3.23	0.86

や5をつけた学生は一人もいない。)これは高校までの英語指導において、学習指導要領に従ってオラル・コミュニケーションや英作文などの発信面に重点が置かれるようになってきたとはいえ、まだ十分な成果が上がっていないということを意味しているのではないだろうか。(以下の調査で、コミュニケーション能力に対する動機が高いことがわかるが、それは学生が英語の他の技能にもまして、writing や speaking 面での弱さを自覚していることの反映であると思われる。)

いずれにせよ、図1から学力テストの結果に基づいて分類された上位群・中位群・下位群が、学生の自己分析の点から見ても妥当なグループ分けであることが裏付けられた。次節からは、英語の学習動機に関して分析し、さらに各群ごとの動機の分布を検討する。

6 学習動機に関して

学習動機の調査項目は、Appendix「調査用紙」の項目27～60にあたる。この部分に関しては、それぞれの項目について自分がどう感じるかを、「強くそう思う(5)」「かなりそう思う(4)」「ふつう(3)」「あまりそう思わない(2)」「全くそうではない(1)」の5点法で評定する形で回答するように求めた。その結果が表2である。

次に上で求めた学習動機の項目に対する回答値をバリマックス回転法による因子分析(主因子法)にかけた。その結果5因子を抽出することができた。各因子に付けた名前と選ばれた項目、及びその因子負荷量を表3に示す。見やすさのため、値の極めて小さなものは表示していない。

第1因子は「異文化理解のためには英語が必要である」をはじめとして8項目で、自国あるいは外国の文化・芸術・歴史についての理解の必要性を述べた項目が集まっており、「教養志向因子」(フムフム型)と名付ける。これは従来の英米文学科が目指していたものと一致している。

第2因子は9項目(うち2項目は因子負荷量が.400を下回る)で、「海外旅行したい」「留学したい」「英語を使って海外で働きたい」など、海外との交流を中心として英語を使って外に向けて何かをするという志向を表すもので、「海外交流志向因子」(ワクワク型)と名付ける。

第3因子は8項目で、「読解力を養成する」「翻訳技術を養成する」「文法力を養成する」「通訳技術を養成する」「スピーチができるようになりたい」など英語学習そのものを志向するもので、「お勉強志向因子」(ガリガリ型)と名付ける。

第4因子は7項目(うち1項目は因子負荷量が.400を下回る)で、第三因子と同じく英語学習そのものであるが、その中でも「英語の聴解力を養成する」「会話力を養成する」「発音を改善したい」「海外からの英語の情報を理解したい」など、英語を話し聴くことへの志向が集まっているので、特に「耳口志向因子」(ペラペラ型)と名付ける。

第5因子は2項目で「子供に英語を教えたい」「中学高校の教員になりたい」というもので、「教師志向因子」(コラコラ型)と名付ける。

次に、これら5因子について英語学力との関連を考察する上で、上位群・中位群・下位群の各グループごとに因子別の回答平均値を算出した(表4)。それをグラフ化したものが図2である。ここでいう回答平均値とは、各因子に有効であるとして選ばれた項目に対する各群の評定(5～1)

表3 英語学習動機に関する因子分析結果
(Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転後の因子負荷量)

項 目					
F1：教養志向因子					
59 異文化理解のためには英語が必要である	0.734				
57 海外の文学や芸術の理解には英語が必要である	0.72				
55 文化・歴史理解に対して英語が必要である	0.673				
56 日本を海外に紹介するのに英語が必要である	0.639				
60 英米人の思想や宗教を理解するのに英語が必要である	0.59				
35 文化による違いを勉強したい	0.504			0.376	
27 本（日本語も英語も可）を読むのが好きだった	0.459				
58 自国の文化・言語の理解には英語が必要である	0.415				
F2：海外交流志向因子					
41 将来英語文化圏へ移住したい	0.712				
36 在学中に外国の大学に留学をしたい（1年以上）	0.668				
37 在学中に短期語学留学をしたい（1ヶ月～3ヶ月）	0.652	0.356			
31 将来英語を使って海外で働きたい	0.65			0.41	
34 外国人と交流したい	0.637				
40 将来発展途上国で活躍したい	0.457				0.396
52 映画が字幕なしで見られるようになりたい	0.439	0.394			
50 英語の新聞・雑誌を読みたい	0.371				
39 海外旅行をしたい	0.353				
F3：お勉強志向因子					
49 英語の読解力を養成したい	0.648				
48 翻訳技術を養成したい	0.636				
51 英語の文法力を養成したい	0.632				
47 通訳技術を養成したい	0.561	0.374			
44 自由英作文力を養成したい	0.512	0.397			
53 英語によるスピーチができるようになりたい	0.497				
54 教養としての英語力の養成が必要である	0.489				
38 英語の資格を取りたい	0.44				
F4：耳口志向因子					
43 英語の聴解力を養成したい				0.732	
45 英語の会話力を養成したい				0.682	
29 外国語そのものに興味があった				0.539	
46 英語の発音を改善したい				0.536	-0.402
28 英語が好きだった				0.488	
42 海外からの英語の情報を理解したい	0.37			0.411	
30 将来日本で英語を使った仕事に就きたい				0.276	
F5：教師志向因子					
33 子どもに英語を教えたい					0.622
32 中学高校の英語教員になりたい					0.524
Eigenvalue	8.588	3.604	2.269	1.829	1.698
Variance (%)	25.260	10.599	6.673	5.379	4.994
Cumulative Variance (%)	25.260	35.859	42.532	47.910	52.904

の平均値のことである。そして、5因子それぞれについて因子ごとの回答平均値をt検定（有意水準 $\alpha = 0.05$ ）にかけ、各グループ間での有意差が存在するかどうか確かめた（表5）。

抽出された5因子のうち、ほとんどの因子について3群間で有意差が認められたが、第1因子（教養志向因子（フムフム型））の上位群－中位群、第5因子（教師志向因子（コラコラ型））の

表4 各因子における群別の回答平均値

	F1	F2	F3	F4	F5
上位群	3.50	3.63	4.23	4.28	2.63
中位群	3.41	3.39	4.00	3.98	2.31
下位群	3.16	3.49	4.07	4.00	2.50
全体	3.37	3.50	4.10	4.09	2.48

図2 各因子における群別の回答平均値

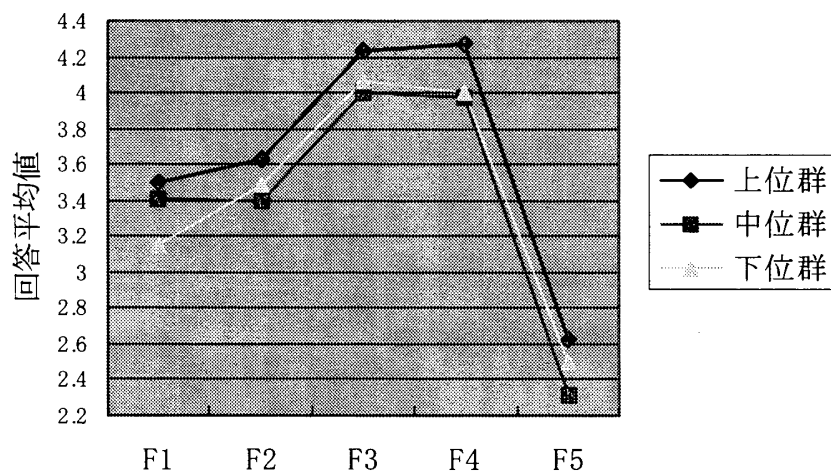


表5 各群間の有意差の有無

	上位群－中位群	中位群－下位群	上位群－下位群
F1	－	＋	＋
F2	＋	＋	＋
F3	＋	＋	＋
F4	＋	＋	＋
F5	＋	－	－

中位群－下位群、上位群－下位群に関しては有意差が認められなかった。

7 考察

それぞれの結果を各因子ごとに考察し、また表2も参照しながら上位群・中位群・下位群の回答の傾向を分析する。

第1因子（教養志向因子（フムフム型））は、5因子の中でも寄与率としては大きい因子だが、因子別回答平均値は低く、学生の英語を学ぶ動機としてはあまり関心が持たれていないことがわかる。上位群と中位群の間では有意差が見られないが、「本（日本語も英語も可）を読むのが好きだった」の項目別回答平均値は上位群が最も高い。また、上位群・中位群と下位群の間には明らかな有意差があり、少なくとも下位群の学生は従来の教養主義的な大学のカリキュラムとは既に志向が違ってきていると言える。

第2因子（海外交流志向因子（ワクワク型））は、表5の因子別回答平均値を見ると、下位群

が中位群の数値よりも高い。また項目別回答平均値（表2）でも「外国人と交流したい」「海外留学（長期・短期）」「海外旅行」「海外への移住」という項目に関して下位群が中位群を上回り、とくに短期留学や海外旅行に対する動機は3群の中で下位群の項目別回答平均値がもっとも高い⁴。「映画が字幕なしで見られるようになりたい」「英語の新聞・雑誌を読みたい」のような、第2因子の中でもどちらかというとな教養的なものは、上位群の項目別回答平均値が最も高い。上位群と下位群の志向の相違がこの点にも表れている。

第3因子（お勉強志向因子（ガリガリ型））は全体的に見て因子別回答平均値が比較的高く、特に「資格」に関する志向は非常に強い。ここでも下位群が中位群の数値よりも高く、具体的には「読解力」「スピーチ」「教養としての英語力」「通訳」「資格」に関する志向において下位群が中位群を上回っている。他方「文法力」「作文力」のような項目に関しては、やはり上位群の項目別回答平均値がもっとも高い。つまり、第3因子の中でも普段の地道な努力を必要とする英語の基礎能力項目に関しては上位群、英語の運用や道具的な傾向を持つ項目は下位群の関心が高いことがわかる。

第4因子（耳口志向因子（ペラペラ型））は5因子の中でも比較的因子別回答平均値が高く、学生のオラル能力への関心の高さが窺える。ここでも下位群が中位群の数値よりも高く、項目別では「聴解力」「会話力」「発音」「英語情報の理解」等について下位群の項目別回答平均値が中位群のそれを上回り、特に「英語の発音を改善したい」という項目に関しては3群を通じて下位群の数値が最も高い。下位群の「ペラペラになりたい」という願望は、第2因子での海外志向の強さと密接なつながりをもつと思われる。

第5因子（教師志向因子（コラコラ型））は、5因子の中では著しく回答平均値の低い因子であった。上位群と下位群の間に有意差はなく、項目別に見れば下位群が中位群を上回っている。つまりこの因子の回答値の低さは3群に共通していて、多くの学生が「教師になりたい」とは思っていないことを示している。第3因子の中の「英語の資格を取りたい」の項目の数値の高さに比べてこのような教師志向因子に含まれる項目が低いのは、これまで英米文学科で取得できる資格の中心であった英語教員免許資格が、もはや「資格」と捉えられていないことを意味している。

全体を総括すると、因子別では第3因子・第4因子の平均値が高く、学生のオラル能力や資格に対する関心の高さを示している。逆に第5因子・第1因子のそれは低く、従来の教養や教員資格にあまり関心が持たれなくなってきたことがわかる。

また群別では、上位群は英語に対する意識が最も高く、文学や芸術、歴史や思想に対する興味も比較的持っていることがわかる。また文法力や作文力のような英語の運用能力に対する動機も他群に比べて高い。下位群は5因子のうち4因子で中位群の数値を上回り、内容的には外国人との交流や資格に対する志向の強さがはっきりと表れている。これは会話力、発音、通訳、スピーチなどの技能に対する関心と対応すると思われる。これに対して中位群は、「発展途上国で活躍したい」「翻訳技術を養成したい」の項目を除いて項目別回答平均値が相対的に低く、英語そのものへの関心が低い。入学後の早い段階で、中位群の学生にうまく目標設定をさせることが必要である。

8 まとめ

本論文では、英米文学科入学生のもつ志向が従来のものとは変化してきていることを統計的手法を用いて裏付けた。これまでの英米文学科が持っていた教養主義的志向にばかり目を向けていると入学生の英語学習動機と必ずしも一致しないことになるし、学科のカリキュラム編成を入学生の志向に合わせて改良していることを外部にアピールしないと、ますます受験生の英米文学科離れが進むことが予想される。そして特に中位群・下位群の学生に対しては、その志向を満足させつつ、英米文学科本来の教養主義的なものにつながる方向へカリキュラムを再編成する必要性が出てきたことを認識するべきである。既に指摘したとおり、特に中位群の学生の動機の低さが目立っており、この層への働きかけが今後重要になる。具体的には入学生のもつ「資格」志向をくみ取った授業科目のさらなる充実と、英語力そのものを強化していくプログラムが必要になる。また各群を通じての「教師」志向の低下は、昨今の教育現場の現状、実際に教師になることの難しさの反映であろう。英語教師の資格が取得できることを強調する従来のやり方だけでは、もはや不足の感が否めない。

学生の学力低下を嘆くのではなく、従来の教養主義的発想のみにとらわれることなく、現実に入学してくる学生の英語学力や志向をふまえて新しい英米文学科の姿を模索しなければならない。

9 今後の課題

本論文で行った調査は、一女子大の英米文学科入学生に限定したものである。したがって、今後に残される課題は二つの方向になると考えられる。

その一つは、他の女子大、他の大学の英米文学科（その関連学科）との連携である。被験者の数をもっと増やす形で調査を進めれば、全国的に退潮気味の英米文学科一般の今後を占う要素が見えて来るに違いない。また英語関連学科以外の入学生との比較も調査対象に収めれば、広く大学生一般の英語動機研究に貢献することになる。

もう一つの方向は、時間をかけた調査である。本論文は大学入学時という一時点に絞った調査であるので、この被験者が2年後（または4年後）にどのように自分の英語力を分析し、学習動機をもちつづけるのか（あるいは変化するのか）をさらに調査を続ける必要がある。そうすることで、英米文学科の現在のカリキュラムへの具体的な評価となり、今後の改革への示唆が得られるはずである。

また調査方法も、今回は調査用紙によるものに限られていた。さらに面接調査法なども取り入れて、数字には表れていない部分へのフォローも必要であろう。

いずれにせよ、この種の研究はまだ始まったばかりで、今後さらにデータの蓄積、調査方法の改善および洗練が必要である。

（本稿作成のために大阪樟蔭女子大学平成13年度特別研究助成費の一部を使用した。）

【注】

- 1 この二元モデルに関しては市川（1995, 2001）を参照。
- 2 大半の大学生は、入試という枠組みが取り外され、大学でも（半ば必修科目として）英語と向き合う段階で、改めて「なぜ英語を勉強するのか？」という自分自身の動機に直面する。このような高校生以下の「外発的動機づけ」要因のアンバランスな大きさという問題は稿を改めて考えたい。
- 3 SPSS での統計処理については、大阪樟蔭女子大学学芸学部被服学科の永野光朗助教授の協力を得た。
- 4 海外への志向は強いといいながら、例えば「発展途上で活躍したい」のようなボランティア的な地道な活動に対する動機は低い。

【参考文献】

- Dönyei, Zoltan. 2001. *Teaching and Researching Motivation*. Pearson Education Limited.
- Gardner, Robert C. and Wallace E. Lambert. 1972. *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- 原田康也他. 1998. 『英語教育とコンピュータ』. 学文社.
- 堀野緑・市川伸一. 1997. 「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」. 『教育心理学研究』. 第 45 巻：140-147.
- 清川英男. 1990. 『英語教育研究入門——データに基づく研究の進め方』. 大修館書店.
- 市川伸一. 1995. 『学習と教育の心理学』. 岩波書店.
- . 2001. 『学ぶ意欲の心理学』(PHP 新書 171). PHP 研究所.
- 宮原文夫他. 1997. 『このままでよいのか大学英語教育——中・韓・日 3 か国の大学生の英語学力と英語学習実態』. 松柏社.
- 中島美穂子・大里文人. 1999. 「英語学習における学習動機、学習方略、英語学力の関係」. 『西日本工業大学紀要（人文社会科学編）』. 第 15 巻：31-40.
- . 2000. 「英語学習における学習動機と学習方略と英語学力との関係の研究」. 『西日本工業大学紀要（人文社会科学編）』. 第 16 巻：21-28.
- 中田賀之. 1999. 『言語学習モチベーション——理論と実践』. リーベル出版.
- Oxford, Revecca L (ed.). 1999. *Language Learning Motivation: Pathways to the New Century*. Honolulu, HI: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawaii Press.
- Seliger, Herbert W. & Elana Shohamy. 1989. *Second Language Research Methods*. Oxford University Press. (邦訳：土屋武久他（訳）. 『外国語リサーチマニュアル』. 大修館書店. 2001.)
- SLA 研究会（編）. 1994. 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』. 大修館書店.
- Yashima, Tomoko. 2000. “Orientations and Motivation in Foreign Language Learning: A Study of Japanese College Students.” *JACET Bulletin*. 31: 121-133.

Appendix「調査用紙」 2001 年度入学生アンケート

このアンケートは新しいカリキュラムをスタートする上で、そして今後の英米文学科の方向を模索していく上で大切な基礎資料となりますので、できる限り正直にお答え下さい。そしてカリキュラム、動機など授業研究に対しての基礎データにも使わせていただきたいので、ご協力下さい。

A あなた自身の基礎データについて（空欄に記述して下さい）

- 1 学籍番号 _____
- 2 名前（読み方） _____ (_____)
- 3 出身高校（所在地） _____ 高校 (_____)
- 4 入学形態（あてはまるものに○をつけて下さい）
 - 1 外部特別推薦
 - 2 内部特別推薦
 - 3 一般推薦
 - 4 一般入試前期
 - 5 一般入試後期
 - 6 センター入試前期
 - 7 センター入試後期
- 5 留学経験（海外経験 何年生でどの国にどのくらいの期間行ったか）
- 6 英語の検定（英検、TOEIC、TOEFL など）現在での資格

B 現在の英語力についての自己認識（得意度）（あてはまるものに○をつけて下さい）

- 7 reading～自分の読む力の自己評価（辞書なしで、80%以上理解できる）
 - 1 初歩的な内容の英文（中2）
 - 2 初級程度の内容の英文（中3、高1）（教科書英語Ⅰレベル）
 - 3 中級程度の内容の英文（高2・3）（教科書英語Ⅱレベル）
 - 4 入試に出題される英文（教科書英語 Reading レベル）
 - 5 上級程度の内容の英文（英字新聞雑誌などの論説）
- 8 listening～英語を聴いて理解する力の自己評価（80%ぐらい理解できる）
 - 1 ほとんどできない
 - 2 簡単な挨拶程度
 - 3 単純な内容の会話
 - 4 複雑な内容の会話
 - 5 ニュース、映画やドラマの中で話される会話
- 9 writing～自分の意志や考えを英語で書き表すことへの自己評価
 - 1 ほとんどできない（10%まで）
 - 2 わずかだけできる（30%まで）
 - 3 ある程度できる（60%まで）
 - 4 かなりの程度できる（80%まで）
 - 5 ほとんど問題なくできる（81%以上）
- 10 speaking～自分の意見や考えを英語で話せることに対する自己評価
 - 1 ほとんどできない（10%まで）
 - 2 わずかだけできる（30%まで）
 - 3 ある程度できる（60%まで）
 - 4 かなりの程度できる（80%まで）
 - 5 ほとんど問題なくできる（81%以上）

C 学習履歴（一般的）（英語にこだわらない）（空欄に記述して下さい）

- 11 中学時代の自宅での1日の勉強時間（平均、特にテスト前は）
- 12 中学時代の勉強方法（塾、家庭教師なども含む）
- 13 高校時代の自宅での1日の勉強時間（平均、特にテスト前は）
- 14 高校時代の勉強方法（塾、家庭教師なども含む）

D 英語学習について（自由に記述して下さい）

- 15 中学時代の英語の授業（どんな授業でしたか？ 文法中心、オーラル中心、和訳中心など）
- 16 ネイティブ・スピーカーの授業（何年生で週何時間ありましたか）
- 17 中学時代の英語の授業で特に印象に残っていること
- 18 高校時代の英語の授業（どんな授業でしたか？ 文法中心、オーラル中心、和訳中心など）
- 19 ネイティブ・スピーカーの授業（何年生で週何時間ありましたか）
- 20 文法の時間がありましたか（何年生で週何時間ありましたか）
- 21 高校時代に使用した辞書（たとえば「ジーニアス英和辞典」など）
- 22 高校時代の英語の授業で特に印象に残っていること
- 23 英会話学校に行った経験（過去、現在）がありますか（いつごろ、どのくらいの期間など）
- 24 テレビ・ラジオ講座の利用して英語の勉強をしたことはありますか。どのようなものをどのくらい利用しましたか（たとえばNHK テレビ「とっさの一言」を3ヶ月見たなど）
- 25 英単語集に関して（何を、どのように、勉強したかあるいはしていないか）

E 留学に関して (あてはまるものに○をしてください)

- 26-1 在学中に留学したいと考えていますか はい いいえ
26-2 樟蔭のプログラムを利用したいですか はい いいえ
26-3 26-2で「はい」と答えた人に、どのプログラムですか
短期 (春夏休み4週間) (ロンドン、スライゴ、フレズノ)
中期 (2年後期の3ヶ月) (ケント)
長期 (1年) (フレズノ)

ここからは、1 全くそうではない 2 あまり 3 ふつう 4 かなり 5 強くそう思う
という数字で回答して下さい。

F 英米文学科を志望した動機 (1~5)

- 27 本 (日本語も英語も可) を読むのが好きだった _____
28 英語が好きだった _____
29 外国語そのものに興味があった _____
30 将来日本で英語を使った仕事に就きたい _____
31 将来英語を使って海外で働きたい _____
32 中学高校の英語教員になりたい _____
33 子どもに英語を教えたい _____
34 外国人と交流したい _____
35 文化による違いを勉強したい _____
36 在学中に外国の大学に留学をしたい (1年以上) _____
37 在学中に短期語学留学をしたい (1ヶ月~3ヶ月) _____
38 英語の資格を取りたい _____
39 海外旅行をしたい _____
40 将来発展途上国で活躍したい _____
41 将来英語文化圏へ移住したい _____

G 在学中にどのような英語の学力を身につけたいか (運用技能) (1~5)

- 42 海外からの英語の情報を理解したい _____
43 英語の聴解力を養成したい _____
44 自由英作文力を養成したい _____
45 英語の会話力を養成したい _____
46 英語の発音を改善したい _____
47 通訳技術を養成したい _____
48 翻訳技術を養成したい _____
49 英語の読解力を養成したい _____
50 英語の新聞・雑誌を読みたい _____
51 英語の文法力を養成したい _____
52 映画が字幕なしで見られるようになりたい _____
53 英語によるスピーチができるようになりたい _____

H 英語の必要度認識 (1~5)

- 54 教養としての英語力の養成が必要である _____
55 文化・歴史理解に対して英語が必要である _____
56 日本を海外に紹介するのに英語が必要である _____
57 海外の文学や芸術の理解には英語が必要である _____
58 自国の文化・言語の理解には英語が必要である _____
59 異文化理解のためには英語が必要である _____
60 英米人の思想や宗教を理解するのに英語が必要である _____